

2018年9月9日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「犠牲」

聖書：士師記11：29～40

エフタは、戦に向かう不安の中で神への誓いの祈りを捧げる。「わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物といたします。」この物語をどう聞いていけばよいのか？

いくつかの解釈がある。娘を捧げるとは言っても、人身供犠、生身の人間を捧げるということより、いわゆる人柱的な意味合いのものではなく、これは神への奉仕のために差し出すことを表しているに過ぎないとする見解もある。またこの時代は、実際にこのような人身供犠、呪いからの解放に人柱として村の娘が生け贄にされることは、他宗教の中に多くあり、その戒めとしてこの物語はあるという見方もある。エフタは「娘を見て衣を引き裂いた」とは、これ以上ない苦しみ、悲しみを表現し、侵してはならない罪を示しているとも言われる。

そして私たちは、このような旧約の物語はイエス・キリストを通して見る必要がある。娘さんの言葉に「彼女は言った。「父上。あなたは主の御前で口を開かれました。どうか、わたしを、その口でおっしゃったとおりにしてください。主はあなたに、あなたの敵アンモン人に対して復讐させてくださったのですから。」」苦しい状況を向けられて、それでも父の言葉に向き合う姿に驚かされるが、この言葉は、イエスの十字架へと向かうゲッセマネの祈りと重なる。「父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マルコ 14：36)。苦しみの中にあつて父の御心にかなうようにと、十字架を受け入れていく姿は、娘さんとイエスの言葉、祈りが重なるように思う。さらにエフタの思いは、「衣を引き裂いて、…ああ、わたしの娘よ」とは、まさに父なる神の思いを、ここに表しているとも言えよう。イエスを十字架へと向かわせた父なる神の思いは、「衣を引き裂き、…ああ、わたしの息子よ」との言葉が聞こえてくる。

もう一つ。私たちの社会は今なお、人身供犠、人柱の上に成り立っている。裕福な国が貧しい国の犠牲のもとにある。聖書は、「犠牲」というものを肯定しているものではない。キリストの十字架も「良かったね、ありがとう」と言うところにあるのではない。犠牲ありの社会の罪があるゆえにキリストの十字架はある。

犠牲が伴う社会、犠牲のもとに成り立っている社会に対する批判的メッセージがここにはある。そしてイエスの苦難は、私たちの苦難と共にある。(神谷)